

大曲農業高校インターンシップの取組

秋田県仙北地域振興局農林部森づくり推進課 技師 伊藤 洋平

1. はじめに

秋田県は豊かな森林資源に恵まれており、特に日本三大美林のひとつである秋田スギは古くから住宅などの建築材や、伝統工芸品の「曲げわっぱ」の原材料として活用されてきた。秋田県のスギ人工林面積は全国1位を誇り、その約4割は伐期を迎え、素材生産量も平成14年を底として年々増加傾向にある。特に県南部の仙北地域では、木質バイオマス発電所や大径材を生産できる製材所が竣工したところであり、益々の木材需要が見込まれている。

しかしながら、秋田県の林業雇用労働者数は年々減少傾向にある。また、年齢構成についても、60歳以上の労働者の割合が35%を占めており、若年層を中心とした新たな林業の担い手確保・育成が急務となっている。

そこで、秋田県仙北地域振興局では、林業の担い手となり得る高校生に林業への興味関心を深め、林業就業に必要な基礎的知識・技術について学んでもらうため、地域内で唯一林業を学ぶことができる秋田県立大曲農業高校の生徒を対象としたインターンシップ学習活動を平成19年度から実施している。

2. 取組概要

(1) インターンシップ対象者

大曲農業高校は、秋田県大仙市の中心部である旧大曲市に位置する農業高校である。学科の一つである「農業科学科」は、農業を中心としているものの、2年生及び3年生時に専門分野の選択として林業を選ぶことができる。インターンシップ学習活動は林業を選択した2年生及び3年生を対象に実施しており、令和元年度は計27名の生徒が参加した。

(2) 体験内容

令和元年6月19日（木）に、大仙市土川字水沢山地内の間伐施行地を会場にインターンシップを実施した。参加した学生27名を5班に分け、それぞれプロセッサ、グラップル、フォワーダ、チェンソー、レーザーコンパスの操作を順番に体験してもらった。なお、機械操作指導及び安全管理にあたっては、地域内を管轄する仙北西森林組合の職員の方々に協力をいただいた。



写真1：プロセッサ操作体験



写真2：チェンソー操作体験



写真3：レーザーコンパス操作体験

体験を終えた後、秋田森林管理署による国有林管理業務の説明や、秋田県林業普及指導員による秋田県林業大学の案内・募集の説明をしてインターンシップを終了した。

(3) アンケート調査

参加した高校生にはインターンシップ実施前と実施後にそれぞれアンケート調査を実施した。設問は林業への就業意欲や林業に対して抱いているイメージ等を問うもので、体験を通じた参加者の林業に対する意識の変化を調査した。

- ①：将来、森林・林業に関する仕事につきたいか？ はい/いいえ
- ②：(①がはいの場合) どのような仕事につきたいか？
 - 1.森林を整備する仕事 2.木材を生産する仕事 3.木材を加工する仕事
 - 4.森林を調査する仕事 5.行政関係(国・県・市町村) 6.その他
- ③：②について、なぜその仕事に就きたいと考えたのか？(記述)
- ④：林業の仕事について、どのようなイメージを持っているか？(複数回答可)
 - 1.環境のためになる 2.儲かる 3.危険 4.夢がある 5.儲からない
 - 6.楽しそう 7.人のためになる 8.きつい 9.人に自慢できる 10.カッコいい
 - 11.きたない 12.その他
- ⑤：(実施後のみ) 今回のインターンシップで一番体験してよかったものは何か？
 - 1.プロセッサ 2.グラップル 3.フォワーダ 4.チェンソー 5.コンパス測量

3. 結果

(1) アンケート結果

アンケート調査を集計し、インターンシップ実施前後で比較したところ、質問①で林業の仕事に就いてみたいと答えた生徒は、実施前が31%であったのに対し、実施後は約半数となる48%と17%増加した。

また、質問②において、林業の仕事に興味を持った生徒が携わってみたい業種は、実施前と比べ森林整備や木材生産と回答した生徒が大きく増加した。当該業務に深く影響する林業機械を実際に現場で操作してみたことで、生徒たちに林業現場で働く実感とともに大きな関心を引くことができたと考えられる。

質問③で挙げられた理由としては、「インターンシップ体験学習を通して木を切る楽しさや林業の働きがいを感じた」「イメージが変わった」といった記載があり、インターンシップによる普及効果はあったと言える。

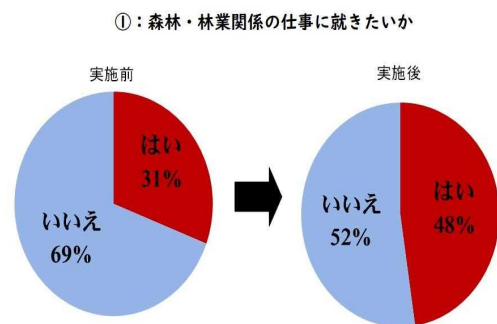


図1：質問①の結果比較

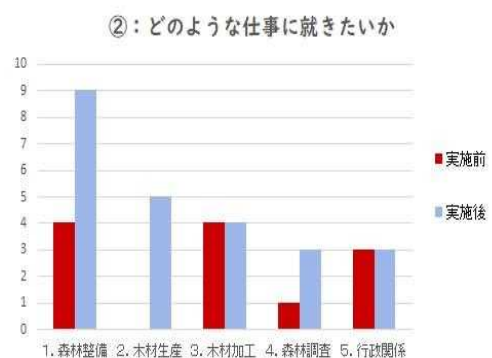


図2：質問②の結果比較

質問④の林業に対するイメージについては、体験を通して全体的に否定的なイメージが減り、好意的なイメージが増える傾向にあった。特に「楽しそう」と答えた生徒が5人から10人へと増加したことが最も大きな変化であった。

一方で、否定的なイメージの中で「危険」と答えた生徒が6人から11人と唯一増加した。これは実際に機械を操作してみて、安全管理を怠れば大きな事故やけがに直結することを身をもって体験した結果であると考えられる。

また、質問⑤で生徒が実際に操作を体験してよかったと感じた機械は、プロセッサとフォワーダが12人と最も多かった。実際に搭乗し、造材や走行を直接体験できたこの2種が生徒にも強い印象を残したものと思われる。

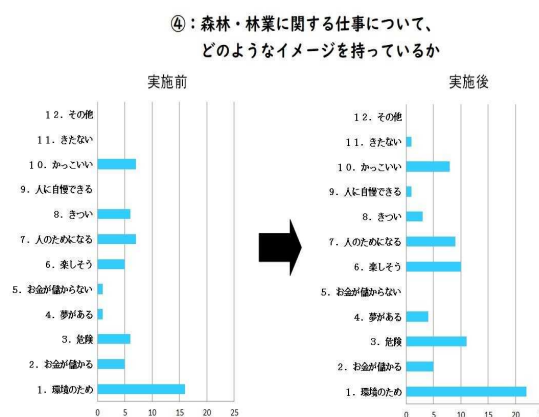


図3：質問④の結果比較

(2) 大曲農業高校卒業生の進路

秋田県では平成27年度より、2年間で林業の基本的な知識・技術を学ぶ「秋田県林業大学校」を開校しており、大曲農業高校でインターンシップを体験した生徒が毎年数名進学している。また、近年の就職状況として、高校もしくは林業大学校を卒業して地域内の森林組合や林業関係企業、自治体等に就職する生徒が、平成28年度を除き毎年5名前後雇用されている。インターンシップにおける現場体験や林業大学校のPRが生徒の進路選択を広げる要素となったと考えられる。

	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度	平成31年度
林業関係企業	1	0	0(4)	0(4)	0(1)
森林組合	0	0	1	1(1)	2
公務員	2	0	0	1	1
林業大学校	4	5	1	2	4
計	7	5	2(4)	4(5)	7(1)

※()内は林業大学校卒業生の就職数

表1：大曲農業高校林業関係進路状況

4. まとめ

大曲農業高校でインターンシップを受け林業に興味を持った生徒たちは、林業大学校への入校や地元林業事業体への就職などにより着実に地域の林業労働者として活躍し、仙北地域の林業労働力の若返りに繋がっている。秋田県の調査によると、平成22年から平成28年にかけて、仙北地域の林業労働者のうち60歳以上の割合が全体の44%から34%と10%減少し、39歳以下の若年層の割合が21%から29%に上昇しており、確かな世代交代が進んでいることがわかる。

本インターンシップ活動を継続していくことで、生徒の林業就労を促し、林業現場で技術を磨き、ゆくゆくは現場の第一線として母校のインターンシップ活動の指導役になって後輩の林業就労へのきっかけを作る、という循環を形成し、地域の林業の活性化に繋がりたいと考える。そのため、今後も高校側と連携を密にし、学生のニーズに応えられる体験活動を提供していきたい。